



Title	農村調査野帳抜書
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1948
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77335
Type	manuscript
Note	朝鮮農村研究（昭和 23年）の、著作集 巻用の編集割付 61頁。
File Information	D003_05.pdf



[Instructions for use](#)

6号3字下

完に對して重要な事項であり、後者は
 村落の研究に對して重要な事項である
 といふ意味から、特に此の二項を抜き
 出したのである。それは戸田先生の還
 曆を祝するものにふさほしいと思つたか
 らである。

一部
 十二木
 婚禮と其前後
 3

薪田部落内の部族の婚礼は年七十九
 才の仕在^某親長か未だ足らずなると云ふ。少
 くと云ふ十年前來皆年であら。部族内には適者
 ちとこころし。姻戚との間に不和を生じ易
 りあり部族内婚はない。姻戚は傍りと同様に
 遠くけちりれはなす。あつと云ふ程言ふ事。薪
 田部族内は句語の子。大山見内はこれ。す
 過婚の例は絶無である。近いと云ふ事は欠乏
 をよく知りずから居る。又姻戚に草木は

1862

<p>子は有つ。</p>	<p>位は有つ。他即ちの過婚を打棄じたは有らむ。</p>	<p>中トウヤクトウ而之過婚す。うか多し。五<small>組</small></p>	<p>有。この新夜のはは康津即兵衛而兵衛定</p>	<p>過婚の例<small>カレハ</small>。江山定、中山定に七知りて</p>	<p>大山定<small>カレハ</small>に七過婚の例は有らむ、輪好定とは</p>	<p>婚す。は曾國有宗<small>程</small>我<small>カレハ</small>りて有。似向<small>カレハ</small>あり。</p>	<p>打つ指に有つて似向あり。然し近しい所と過</p>	<p>違ひと之と過婚す。近頃は姻戚と近しく</p>	<p>行ふ妻も多くなりうはたかく有らむ成す可く</p>
--------------	------------------------------	--	---------------------------	--	--	---	-----------------------------	---------------------------	-----------------------------

某氏(七十五万)
 白采富氏の姉妹及ひ其の孫女を嫁せしむ
 行つて部族は次の子あり。

妹 伴¹ 本向江山里

妹 蘭² 本向龍磐里

妹 牛³ 本向即有治向芳村里 (二ノ三ノ四里)

女 連¹ 本向中山里

女 蓮² 本向龍磐里

女 中³ 本向即有治向基洞里 (二ノ三ノ四里)

孫女 順¹ 本向中山里

孫女 順² 本向中山里

(二ノ三ノ四里)

仲今人は友人、知人、素客よ。行く

人知仲今人に。よ。行く。高

仁用は世女。よ。娘。事。知。高

よ。は。足。心。行く。子。を。し。た。り。高

行く。男。の。御。あ。う。は。女。か。娘。と。心。行く。娘。の

御。あ。う。は。父。か。男。と。心。行く。よ。い。と。決。意

す。と。男。の。御。あ。う。年。紙。の。清。婚。を。す。即。ち

張紙(キヤンカゴ)に書いた清婚書(キョンオンソ)を送

よ。若。水。は。下。人。あ。い。を。持。つ。て。行く。下。人。あ。い

と。よ。は。知。人。の。下。人。を。借。り。て。使。者。と。す。高

時節即は何と持つて行かぬ。世の例にそは

ふ知す。と失法り法紙に書くと許婚書(おおし)

しを送す。さうするのと、次に男の例あり四目見(し)

一廿と云つて張紙に男の生年月日を書くと

しを送す。是の時には四目見と昔に世の服地

(別は昔日は擇はぬ。)

にあり絹布を送す。使者は常々下田力又は同好

友身知の者下す。使者は町屋に接する。

四目見と昔に上流には金を送りぬ。下流程多

額金を送す。故に下流には婚期を過ぎても

婚期に婚書ありぬ者多し。此は婚期の形式

は両班も常夜七回一いり。

四日は多けよと、女の例いは、擇日(テギル)

に左の人、婚儀の日を定め、通知す。擇日

とは五行を解す人、その字ある。今の一

向に一八位は居よよ。四日の便名は

可算に待別して、
一應三のあ、
四日、
是れ又は十日

位、
如、
内、
雇人、
便名とし、
婚儀の日を
通知す

日、
取、
り、
の、
通知者は
擇日状(テギル)

ヤ、
ン、
と、
云、
ふ、
その、
可算に
法、
孤に
書く。
擇日

物、
は、
し、
る、
。、
根、
日、
知、
を、
書、
け、
よ、
と、
男、
の、
書、
れ、
也

又扱白ん足て貰つし、そ水てよけ水はま

、とし、要け水は又便者と送よ。

式は^レ女の宗て有よ。男カ悔おは。我即と

縁配(アベ)と云あ。又配行(ヤン)と云あ。中房と

原んニ云テ年若、直は申注以上、は聲(軍)りく

も随行した。縁配は我郎の父兄伯叔父又は近

我名中より一人行くの、原所り。中房は

下男格の者てあよ。我郎は花ん集よ。縁配も

花ん集よ。中房は一人て花と若員つて馬て行

く。花拍の中んは、贈物も、水てあ。そ水か

婚書紙(おんしやう) 此は子か三人也

九と述女の字は太切に保管して置く。新婦

を忍れよ為りてしや。太切な結婚證書

あゝ)とその日に女あ看よ衣眼をかむと冠と足

の外に布地と若手入れのあゝ以前中流以上の家の婚儀に通行せん 障屏は道中の

音頭取りとしん。歌いはちく拍子しや。替力

馬車と云ふ。昔中流以上の家の婚儀には替力

リケンが隠形しんふに王下新婦をとりて

女レの節夜に入し、女の字の述所の字か控

へ字になつて片よりのその字に入す。その字

く す ん と す よ う と す の 筋 を 結 合 は 奪 い と す。	若 年 達 を い て つ ら を す す。 新 郎 を 扇 で 扇 を か	に 向 ふ。 その 途 中、 女 供 の 乱 の 名 也。 都 落 の	を 看 る 新 郎 は 馬 に 乗 り 結 配 は 異 行 と せ の 宗	勝 を 看 せ よ。 その 水 牙 は は 祝 船 に 行 む い。 官 船	し て 中 房 は 駈 馬 に 戻 り す。 そ の 新 郎 に 官 船 に 祝	の 中 に 水 を 納 幣 の 儀 と す る。 納 幣 の 禮 を す	物 を 答 員 に 馬 に 乗 り て 新 婦 の 字 に 行 り て 納 め	ま 、 尚 早 に 合 婚 を す よ。 一 休 め て 中 房 が 又	の 事 を 駐 者 に 告 げ し て お 茶 や 焼
--	--	--	---	---	---	---	--	---	--

色 の 抑 回 答 を し て 其 節 を い ず め 也。 中 房 が	補 佐 行 を す 也。 中 房 は 去 妻 也 大 吉 人 の 身 代 也	へ ち っ 々 磨 磨 し や う と す べ ぬ 也、 昔 年 迄 は 吉 人	の 意 見 を 伺 へ る 也。 意 氣 あり 何 か 一 つ 祝 の 印 と	し て 筋 を や ぶ り に なる 也。 牛 中 迄 と せ や 也。 こ	の い た づ け を 奪 筋 (タ ン ソ ン) と 云 へ 也。 奪 筋 は 念	上 何 回 と な く 行 り ぬ べ り 也。 奪 筋 の 時 の	抑 回 答 は、 例 へ は 延 思 に 人 の 新 意 し て 昔 少 の	病 に 馬 に 来 っ 々 何 故 に 行 く か 云 へ 也 奪 筋 也。	色 の 他 色 へ の 目 を た だ 悪 く 見 回 す 也。 時 に は
---	--	---	---	---	---	--	--	--	--

實際の定率と有り 仲除人々入下 協合も有り。

高扇とや、青年達は未婚者も多し、
既婚者

此片木は三代の男も片木。

高扇と清きし、一行は或女の字の式瑞に

也。女御の近頃は去来、丈夫く也。以上は

大庭麻の行つたか、今仕度に行ぬ。天幕と片り

中五竹と松と椿と飾り。皆生花と也。

その外に色々の花ついでと飾り。麩の餅と両側

に、つたひとあり。中央にて、つたひとあり

の上には、米と豆をへ、
蠟燭と、
貝と、
鮎アサギと、
木籠

又市製の雁か卓上に飾る。

の奠(ホ)か二匹飾つて奉る。其座か西側に振

けり奉る。

一行か式場に入ると、人接(司會)か指し行

み。一回は十の答禮す。次に執事(司會)か指し

て歩しと席につけとふ。拜即は馬か、露積

を込場にして降りよ。粉(糺)積んんか露積

奉る。二、の露積は果の儀一儀と奉る。粉

奉る。粉、受けかは露積を奉る。是の儀

はソいと云い粉一石を奉る。町の粉奉る。

奉る。次に執事(司會)か指し、拜去以下席につ

次 に 新 郎 正 坐 せ よ 。 次 に 新 婦 回 互 禮 せ よ 。 新	之 上 新 婦 信 置 ん 置 く 。 次 に 新 婦 出 よ の 号 令 。	任 仰 つ て 立 て て お け た 麻 風 を と つ て 、 兩 方 包	に 東 方 向 つ て し り と け の 号 令 。 其 こ の 号 令 は	号 令 お け た 。 次 に 新 郎 二 回 禮 せ よ の 号 令 。 次	よ と 云 お 。 下 せ お 福 佐 す 。 次 に 新 郎 立 て の	お 新 郎 正 坐 せ よ と 云 お 。 又 右 の 指 に 雁 を お け	つ 、 つ い て 片 よ 。 一 回 席 に つ く と 、 次 に 報 禮	人 接 と 呼 ぶ 宴 の は 新 郎 に よ 新 婦 に よ 一 人	く 。
--	--	--	--	--	---	--	--	--	--------

其印形婦人飲
 ありの盃は三層
 杯也。
 一、ウシゲヤン
 銀又は陶の盃
 二、ノツヂヤン
 三、ヒョウヤン
 瓢の作る盃
 右の不安の若とい
 一回下、飲むのであ
 る。瓢の盃は二
 個で三色の杯
 糸の両側につい
 居る。

即ニ夜、禮せよ。午を洗へ。之とて、新即も新婦
 も次、^りく、心午を洗ふ。次に縁酒を飲め。以
 上の号令に從つて、其の直ぐに行けり。式は既
 だ。

次、^りに新婦入水の号令あり。次に新夫入
 水。新即は内房に入。一息新婦内房に入り
 禮装をとり、おむすにゆく。その後新即も内房に
 入り。その際人扱お揃をす。之とては、お膳
 り、^り起ま、積ん、いあ。人物も、上客は合廊
 に新即は内房におむすにゆく。

房て新部と梅付す。のは人梅と世術の近記の

若い男遣い。余廊には老人の男遣い。と

。世は余廊と云ふい。

内房と梅御にはい。馳走又深山に梅人。と飾

と云ふ。内房には新部の人梅の膳か。と号す

。皆も梅付。と云ふ。人梅の方。と云ふ

酒を。つ。治に新部。皆酒を。梅子。と云ふ

。同い。新部。と云ふ。余廊。と云ふ。梅子。と云ふ

。余廊。と云ふ。上。梅。と云ふ。近。と云ふ。と云ふ

。日。梅。と云ふ。若。梅。と云ふ。酒。梅。と云ふ

録
あ
ま
よ
。人
梅
や
下
女
あ
ま
の
つ
。母
は
さ
花

に
と
り
え
ん
な
い
。念
ね
人
梅
あ
ま
新
郎
を
案
内
し
て

多
室
め
に
敷
芳
ち
と
は
つ
か
た
ま
。上
室
か
つ
ま
な

う
足
送
り
ま
せ
よ
。上
室
あ
ま
海
水
は
お
寝
み
の
娘
孫

に
客
向
に
つ
か
ま
よ
。ま
し
て
又
内
室
に
向
う
せ

よ
。人
梅
は
ま
ま
ま
ま
。ま
の
前
に
新
郎
の
若

い
ま
送
り
の
つ
ま
よ
。ま
の
向
新
郎
は
新
室
に
居

ま
の
ま
ま
あ
ま
人
梅
あ
ま
ま
ま
。新
郎
の
婦
や

伯
母
あ
ま
新
郎
を
新
郎
あ
ま
一
人
居
ま
。内
室
に
客
内
し

こ
ま
ま
。ま
ま
ま
ま
二
人
の
お
膳
あ
ま
ま
。酒
も
あ
ま
ま
。

を と い て や よ 。	前 に 、 男 女 の 髪 の 結 ひ 目 (耳 編 キ ン ム イ ト 云 ふ)	と 終 つ て 二 人 は そ こ に 宿 す 。 そ の 晩 寢 に つ く	然 し も の 中 に 女 が 男 に 酒 や 飯 を す 、 め よ 。 公	向 い て 片 よ 。 男 が 泣 き お け て も 返 事 し せ ぬ 。	よ う は 新 婦 の 母 、 あ よ よ 。 そ の 時 新 婦 は 大 抵 経	私 志 か の と い て 是 よ 。 一 着 無 心 に か つ て 見	人 工 で 食 す と い よ 。 そ れ を 隙 の 隙 向 か う 行	髪 を 望 れ た ま 、 と い ふ よ 。 余 人 去 り 新 即 新 婦 二	こ の 時 迄 新 婦 は 娘 と し て の 髪 形 で あ り 。 即 ち
---------------------------------	--	--	--	--	---	---	---	---	--

郎 の 字 に 着 く ま り に 、 お 郎 の 側 か い に 下	粧 を い し 一 休 み す ま り に あ り 、 一 行 を 出 す 所	新 行 の 場 合 も 軽 か ら な い 。 新 婦 は こ の 化	行 進 す 。○	の こ 大 事 な 行 所 い ま す 。 人 夫 は 行 所 を あ ら わ	に し た ら ば 行 く 。 以 時 に 竹 葉 司 等 も 持 つ て 行 く の	下 女 は 馬 に 乗 り て 行 く 。 一 行 は 土 産 物 を 持 つ て	に あ り て 。 皆 籠 に 乗 り て 行 く 。 但 し 上 流 の 所	へ あ り 。 此 時 に は 婦 を い し 一 指 に つ い て 行 く 所	く 。 お い 索 架 に は さ く は 乳 母 も つ い て 行 く 所
--	--	--	-------------------	--	--	---	--	---	--

心は、 補佐 紋の 世 (新郎の 姉、 見嫁 母) か 指 導 し	利し て 山 出 妻 水 は 名 高 り さ り す 。 世 の 両 側	尊 厚 心 は 一 人 毎 に 祀 を し て 酒 を つ く 。 其 他 に	多 い 。 又 庭 で 奉 仕 す 。 新 婦 は 新 郎 の 直 系 の	を 姑 曾 祖 を 云 ふ 。 姑 曾 祖 は 大 庭 に 行 お 場 合 か	お と の 父 母 は い ろ 多 い の 近 所 に 控 居 お し ま す 。 是 れ	心 は ソ ノ 先 に 祀 を し お け た は な う ぬ 。 そ の 上 に 浴	く つ て お し ま す 。 念 の お し ま す と 、 婦 婦 は お つ つ 分	い ろ 世 に 人 接 お つ く 。 新 郎 は 金 廊 の 膝 に つ	廊 は 金 廊 に 、 新 婦 は 世 内 房 に お す 。 そ の お 舅
--	---	--	---	--	---	--	---	---	--

<p> 子 其 日 又 是 聖 日 に 向 け る 時 新 婦 の 父 </p>	<p> 子 余 の 子 孫 と 結 配 と して 行 った 新 婦 の 父 </p>	<p> 子 余 郎 に 別 れ ず 行 け る 男 と 女 は 別 れ る 事 </p>	<p> 子 巫 女 神 の 呪 い 又 厄 事 が 多 くなる 倉 庫 は 内 房 </p>	<p> 子 神 祝 は 其 の 意 義 の 重 要 なる 事 </p>	<p> 子 二 一 に 別 れ る 幣 帛 と は 贈 り 物 即 ち 祝 物 の 意 </p>	<p> 子 今 分 新 婦 の 一 部 が 持 考 して 来 る 片 の 意 </p>	<p> 子 持 った 二 束 の 意 義 なる 事 三 束 の 意 義 なる 事 </p>	<p> 子 手 と 身 と 二 の 意 義 なる 事 幣 帛 類 に 需 たり の 意 義 </p>	<p> 子 禮 を さ せ 酒 の 補 佐 の 女 子 二 の 意 義 なる 事 </p>
---	---	---	---	---	---	---	---	---	--

はゆ房に穿けす小娘と袂の格好をす。

娘は父に最終の盃をす、女。父は将末に致

し、河洞の格好をす。是の時娘は一筋に

聲をあげて泣く。

其夜か、お嬢はお夫と一夜に寝く。三日目

位か、同象を格にす。

以上述べたお嬢に婚禮の終二三年了りてか

の期子かあつて、愈々お嬢はお夫と同居す。

格に格つて時にお嬢は格好の他はこれ

はカレ、異つてお夫と格好の他はこれ

シンボル

禮とは婚禮の儀に亘るに姑舅禮あり。然し

その儀ニ至るは新婦は其宗に生れし

ハ中ニ夕の儀然あり。新夫は其同新婦の宗

に過か奉前カ瑞令と曰いであり。ニク形式也

比地方に若ありあり。然し

の新氏は稀にし。此行はあり。この方カ理費

加多くありありあり。

姑舅禮あり。新婦は其の宗に死ぬ

あり。起居す。新婦は其の宗に死ぬ

新婦は三年間に生宗に納む。その生宗に

※此は想を以てキムと云ふ。と云ふは其の意也。

這當す。期了は此處に去い。大抵は數ヶ月て

也。暫くは三年了も生字に這當す也。其の

場合も斯夫は逆し行く。其の許に逆ぬの

はあ。此は望視す。其れは、其の

打す。と云ふ、其れ也。

新婦か子を産む場合に生字に喟す事は、其

去婦には、其れ也。其れは、其れ也。生母か

か産の午御に、其れ也。其れは、其れ也。其れ也

り、其れ也。其れは、其れ也。

新即新婦の其の親は、其れ也。其れは、其れ也。

二部 部 落 神 ^{12 本}
 (府君堂とスサノヒ)
 3

月瀨里内の各洞には皆一様に部落神とし

二種類の新^言作対象あり。一つは府君堂とい

はスサノヒといであら。月瀨里内の各洞が皆さ

うといあり。ほか、なく、龍埴面内の六十五の

洞にフイ^いも皆然りあり。但し月瀨里内の

洞^{上下の}二つの洞になつて居る松田洞には奈スサノ

ヒは^い理花の面長さんの自家の山に在りて居

るが、府君堂は在りない。然し堂に在りて居

る府君堂の場に私自身行つてもみせし。その

麻呂をかくしつゝてくたつたか、いふの
情もよく分つて居る。その事について
記したいと思ふ。

麻呂 臺も又サレたも昔に洞の宇麻呂とし

こ此辺に何水の洞にも付、下あまの橋

あま。龍坪雨か、瑞興の色ぬを經し、それか

ら新幕あ、和任徒あ、まつとあ、あま

か、その途中に通過した洞にり達せし

た何水の洞にも、身すたの堂木、木作

い、**麻呂** 木、**木**、の小さな木が山高、山の上

にあつてすくそ水と分よつてあつた。又スサ

の家燕の向やろ

にすい山人宋の附近に一とすは高く繩巻し居

し瑞合か多つのですくそ水と分つた。

月瀬完のぬのぬの洞のぬ上松田洞と下松

由洞のニ村外におけり村君

し所君堂は堂とはよめぬ、大抵の場合堂はな

い。財力豊かるところには堂を建てて居る場

合もあよとよめぬ、一般には小さな林でも高

山の頂上にあよその林の木がフクシイ月瀬完露積洞の所君堂は部

落の春好にあよ山の尾根の上にあつた。雨積

に布かまきつけあよ。まの木が 坪年の九月	かあよ。此空地に入 正面の一本のノがチ	乙見よと四五坪位のや、空地にな たところ	がチ所んに足り水よ。麻糸 林の中に入	て、此林の周囲は石の多い草 田で小さな	この麻糸林はノがチと 針葉樹のあ きな林	此は巴は一畝さくか りあよりのであ うり。	奥のあよとこ ろでこの辺は 一畝さい新 築と	洞は此所に 群居して 韓山李氏 一門の宗
-------------------------	------------------------	-------------------------	-----------------------	------------------------	----------------------------	-----------------------------	---------------------------------	-------------------------------

にあつた

九月の~~日~~祭りの時につけられた織物

の外に一昨年の祭りの時につけられたもの

前につけておいたものか、~~に~~腐朽にまかして

ア。氏布をつけてア。一か、か麻呂堂の神

作であ。^{おん}タシはア。ア。ア。ア。ア。ア。

、^{おん}しこの林の中の一か、^アは皆^アア。ア。

ア。布をつけてア。一か、^アは林中一、^ア大、

な木もなく、^アい木も^アア。ア。

林中^ア一、^ア高い一、^アは四、^ア位も^アア。

布をつけて一、^アか、^アは二、^ア向位も^アア。

人為のあとはない。強いのをよへは、比喩を伐
 採しなす。強いのをよへは、比喩を伐
 よと云へば、云ひ。林の中には、かきの外に
 数本のクヌギの木もあつて、片々。林は金作
 の三四十坪位である。のりの時
 新葺の人は、九月九日に祭家かこゝに来る
 祭りを、雨の行かぬ外には、平日に他人の
 り来よ。橋本平は、全山あつて、こゝに、
 には、あつて、七の子の齋戒があつて、少
 し、機わがあつて、こゝに、来水は、互つて、
 神

四つを蒙りて記せし水に管す。

この露橋洞の府石堂林とて呼ばれ、此は京城の

近郊牛耳洞の府石洞を思ふに去した。この牛耳

洞の府石洞は統曾統曾府石堂の甲に足取り洞か

示してあり。露橋洞の府石堂は大作牛耳洞の

府石堂と同一の形式である。月瀬月瀬洞の

府石洞は皆大作の形式のゆかりに神像とて

云ふ可きものほ樹木である。村の人に同くと

露橋洞の府石堂や回教洞の府石堂林の神像は木

と石たると云つて居る。然し露橋洞の府石堂の

今下は三の田一帶には赤松が繁つて居る。

篤徳洞

梨の木

斎院洞

柳楊の木

内洞

柳楊の木

陽村洞

栗の木

露橋洞

ノカケの木と石

敬洞

楠と石

次にスサノハミツルミの御水の洞にもあり。新島

堂が岩山の上又は山腹にあり。洞に對して、スサ

ハミツルミは鳥居のすく傍又は人家の間にあり。

の跡路

〇 前部が、公的のたゞ待たず新の、前部が男
 物に即ち強えは女性的の玉つる物に成い不
 だ。
 〇 四教洞のズサに十はは室に足車取匠本であ
 だ。此洞の内に二んな匠本は他には念然あり
 〇 楠木と漢字では表わすは、この楠木
 〇 他に、府名をのたゞすし、一本身の外
 には、念然ありと云ふ事であつた。然し新の
 足んとは、此匠本は同一の指抱ては有い
 柄に即ちる。四教洞のズサに十はは、民衆校の

と云ふ事であつた。松を ^{地方} に多く植	同、井戸が ^{あり} 。二の ^{スサ} は柳の木だ	d。そにかう ^は か ^や に流るところに松	庭ついで ^と ころにある。矢張り ^の あ	<u>菊室洞</u> の ^{スサ} は今の ^近 に ^さ ん ^か の	あつた。總之 ^{他人} の ^神 の ^為 に ^築 た ^し た。	と、あつた。又 ^今 より ^わ さく ^し た ^い 護 ^木 だ ^ら ぬ	には ^山 の ^松 と ^葉 の ^松 が ^二 尺 ^は か ^り の ^人 形 ^が あ	すく ^は い ^は 湧 ^泉 が ^あ つた。スサ ^は 十 ^の 松 ^本	の人字のすく ^は 附近の ^山 の ^岸 に ^あ つた。その
--------------------------------	---	---	--	---	---	---	---	---	--

片かつりゝあつた。又地上に藁を積つた足根

の跡をいへる。あつた。あつた。こゝれも他人

新乳の吃物ゝあつた。こゝのふかしの汁は余り

大根の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

あつた。酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

月夜は酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

酒の汁をいへる。こゝの位の大根の汁は酒の

陽村泊

栗の木

鹿持泊

柳の木

四敷泊

楠の木

松田泊

樹種不明

柳の木と云つては、松の葉を所滑日有、柳いはなく、楊

と云のてあらう。ボフクカカい。

祭りは一年一回九月九日に雨、~~祭~~雨を同日に

行はれど。四敷泊では祭宿は女であら。即ち

祭日か近づくと予め泊の内で二人の祭宿にな

どせか思宿さ水だ。宿名をスサニ相対す。

に對す。

若と 幼くしてある。祭壇には、その末の病人の
 片背の家の若く、子が多くなく、
 婦人が遊定の子。子が多くと不潔な事が多い
 いかうてある。祭壇の前に祭物として白い米
 の餅と雑穀の餅を用意す。一人の祭壇は
 米の餅を捧げ、九月九日の夕方に七時吹麻
 石等に詣り、その若餅を供へ、洞内の平安を
 祈る。又一人の祭壇は雑穀の餅を捧げ、
 夕方に洞内のとに祈り、その供へ洞内の
 平安を祈る。餅の材料は各社から出し、金りの

たううゝの事。

有定洞は府忌とスサハの祭官の器

定は毎年九月一日に洞窟を周る決ま。

その祭官の事と若くは祭費の事と決ま。

祭官の宗には一箇子前かす他人の出入は禁

かす。又部族内は外部との出入は禁

かす。若くは祭りの事と同に部族内は死

者かす。祭は延期とす。祭は九月九日

かす。祭とす。一船には府忌祭と

云々。

乙字下

ころの行方祭物を供へて祀り。その時は祭

文はかく口説く新文句も云ふか。その文句

は一定して片だ。その文句は

この洞中には~~何~~あだ。人の数も~~何~~人居

る。悪い病氣と~~何~~悪い行い~~何~~は牛里万

里遠いところに~~何~~り~~何~~け。牛も豚も鶏も

一匹も死なない様にしなさい。年中悪

い病氣は入らぬ様に助けて下さい。私や

新築の隣人達は何も分らぬか。スカルナ

はは何も知つて居ないか。助けて下さい。

と、おのゝこゝろ。この新い文句を、おのゝこゝろ

と、スサレサレに、布片を、すきつけよ。その水で

染は、純じり、きり。染物の、染い、は、宋に、打つて

吟、洞、ゆ、各、心、等、分、に、強、け、て、や、よ。

府、名、を、や、ス、サ、レ、サ、レ、と、巫、女、と、は、同、じ、に、有、一

。け、れ、と、も、フ、ク、ン、サ、レ、サ、レ、や、ス、サ、レ、サ、レ、を、現、張、か

役、つ、た、り、職、し、た、り、し、た、る、ん、。そ、の、四、分、一、無、病、か

流、行、す、の、の、た、と、華人、か、た、い、と、す、と、。巫、に、た、の

ん、い、フ、ク、ン、タ、で、ク、ツ、を、行、お。即、ち、各、戸、に、米

や、酒、を、出、し、合、つ、て、そ、の、水、を、染、物、に、し、て、巫、に、サフ、ク

ンタニて、歌舞をやつて世にふのりや。その時

に村の人達も之物にゆく。九日祭は午正で巫

が行わねはクツである。巫か片やけはクツ

は出来ぬ。

松田洞大には現在府民売かたひ。前には松

田洞か、回教洞に通す。峠の尾松ついでその松

田を足下すところには府民売かたひ。ポクン

十は皆余松並すな松の木である。い

その栗田雨の松月見の九道寺今は歸進寺の

佛か、その寺の建立の為に築かつて一月

も泊りこみ、洞民を説き伏せ、佛敎のな

郷をゆく。ゴクンナムを依つて、

か、あつたに、し、依つて、持つて、

、あつた。その時に、タ、ナム、

も、持つて、ゆく。た、あ、そ、

忍、堂、は、あ、あ、の、事、